

# 井上円了の心理学の業績

恩 田 彰

## 一 西欧の心理学の移植と東洋心理学の構築

心理学は明治時代にわが国に移植されたが、わが国の科学的心理学の基礎をきずいたのは、元良勇次郎と松本亦太郎である。元良はアメリカのホール (Hall, G. S. 一八四四—一九二四) に学び、また松本は実験心理学の創始者であるドイツのヴント (Wundt, w. 一八三二—一九二〇) に学び、欧米の心理学を継承している。しかしここで見落としてはならないのは、当時独力で欧米の心理学の多くの文献を読み、沢山の心理学の著者や論文を残した井上円了の業績である。

彼らは、いずれも東洋の思想・文化に非常に関心を持ち、それぞれ業績を生み出し、東洋心理学とくに日本の心理学の先駆者となっている。とくに井上は『東洋心理学』(明治二九年、哲学館刊)、『仏教心理学』(明治三〇年、哲学館刊) という書名の著書、禅の心理について論文を書いている。さらに妖怪学という名称のもとに独創

的な応用心理学の分野を開拓している。

元良、松本らは、西欧の科学的心理学をわが国に移植することに重要な役割を果たしたが、井上の場合、西欧の心理学と東洋の心理学を結びつけて、独自の東洋心理学をつくり出している。井上の業績は、当時においては、あまりにも先駆的であったのである。

一八七九年にヴントは、ライプチヒ大学で世界で初めての心理学実験室を創立した。これは心理学が哲学から分離して、科学としての道を歩きはじめた最初の道標であった。

わが国では、幕末から明治初期にかけて、人文諸科学の導入につくした西周は、スコットランドの能力心理学を継ぐヘヴン (Haven, J. 一八一六—一七四四) の『Mental Philosophy』(一八四七)を『奚般氏心理学』(一八七八年、明治十一年)と訳して、日本で早くも心理学という言葉を使った。その後、一八八二年(明治十五年)には、ペイン (Bain, A.) の心理学が井上哲次郎により、『倍因氏心理新説』として出版された。そのほか、新しいものが翻訳出版された。しかし、それらはすべて哲学的なもので、新しい生理学的、実験心理学は紹介されていなかった。

このような状況の中で、新しい実験心理学を日本の心理学の基礎においたのは、元良勇次郎(一八五八—一九一一)であった。彼はジョンズ・ホプキンス大学の下で研究し、一八八九年(明治二十年)にわが国で最初の心理学の教授となり、そしてエール大学に学び、後にライプチヒ大学でヴントに学んだ松本亦太郎(一八六五—一九四三)の協力を得て、一九〇三年(明治三十六年)に、東京大学にわが国で最初の心理学実験室をつくった。この意味で元良と松本はわが国の科学としての新しい心理学の基礎をつくった人物といえよう。

しかし、元良は当時の西欧心理学と、わが国の伝統的思想を総合して、心理学の体系を建設しようとした。彼

は第七回国際心理学会議において発表したものを「哲学雑誌」（一九〇五年）に「東洋哲学における自我の概念」としてまとめた（Minami, (南)、一九八〇）。この中で禅心理学を発表している。また彼は、意識は経験によって知ることができる。これが直覚であると述べている。

松本亦太郎は、元良と協力して日本の実験心理学の分野を開拓した人物であるが、他方、外遊中、欧米の美術館や寺院を歴訪して、絵画の研究をしており、『絵画鑑賞の心理』（一九二六年）、『現代の日本画』（一九二七年）などを著し、東西の絵画のみならず、日本画において造詣が深く、大正三年から六年まで文展（文部省美術展覧会）の審査員をしていた。この点、西欧の心理学を学び、日本の実験心理学の道を開いた元良と松本が、いずれも東洋心理学に関心を持っていたことは、日本の心理学を發展させるうえで大変意義深いことであった。

元良、松本の影響を受けた日本の研究者の中には、独創的な心理学説を発表しているものが少なくなかったが、その中には仏教とくに禅の影響を受けている者が少なくない。たとえば、千葉胤成（一八八四—一九七二）の固有意識、佐久間鼎（一八八八—一九七〇）の基調的意識、および黒田亮（一八九〇—一九四七）の勤があげられる。

## 二 井上円了の心理学の業績

井上円了（一八五八—一九一九）は、明治一四年（一八八一年）東京大学文学部に入学、哲学科に籍をおき、学生でありながら先輩の井上哲次郎、有賀長雄、三宅雄次郎（雪嶺）らに呼びかけ、さらに加藤弘之、西周などを動かして、日本で初めての哲学会を創立させた。時に明治一七年である。翌一八年に東京大学を卒業、明治二

〇年に「哲学書院」を設立し、そこから「哲学会雑誌」を創刊し、『心理摘要』を出している（井上、一八八七）。そしてその年の九月に哲学館（東洋大学の前身）を設立したが、その時応用心理学を担当したのが井上円了であった。哲学館の講義内容は、明治二十一年一月から「哲学館講義録」として出版されるようになった。それによると井上の講義録は「心理学（応用ならびに妖怪説明）」という題がつけられている。その点井上は、一般には生じない、不思議な現象を妖怪と名づけ、これを研究する方法として心理学を重視し、妖怪を応用心理学の対象の一つとしている。井上は、真理を探究するだけでなく、これを日常生活に役立たせるため学問の応用を重視している。『記憶術講義』（井上、一八九四）を書いたかと思うと、『失念術講義』（井上、一八九五）を書いている。すなわち記憶も大切だが、よけいなことは忘れたほうがよい。よけいなことを忘れないで苦しんでいる不幸な人を救うには、失念術が大切だと述べている。後にこの失念術を含めて『新記憶術』（井上、一九一七）という本を出している。次に井上が心理学に関してまとめた著書や論文の内容について考察して見よう。

### 1 妖怪学と心理学

井上は、当時の沈滞した仏教に活力を与えるために、キリスト教を批判する論陣を張った。すなわちキリスト教は、近代科学の成果である地動説や進化論に反し、さらに近代哲学に反すると批判した。そして西洋の合理的な近代哲学に最もよく適合する宗教は仏教であると主張した。そこで西洋哲学の合理性によって仏教の再生をはかろうとして、まず仏教から妖怪、迷信をとり除かなければならないと考えた。さらに仏教のみならず、日本の近代化のために民間で行われている妖怪の本質を究明し、迷信をなくすことを自分の使命と考えるに至った。妖怪というのは、井上の論文「妖怪学と心理学との関係」によると、ふだん見たり、聞いたりしないような特殊なめずらしい現象である（井上、一九〇二、八八一—〇二ページ）。また異常にして通常なものではなくして、

多少不可思議な意義を有するものである。そしてその生起の原因は、今日の科学的な知識や常識によって未知のものをいう。妖怪を実怪と虚怪に大きく分け、さらに実怪は真怪と仮怪の二種に、虚怪は偽怪と誤怪の二種に分ける。偽怪は人が何か目的があつて故意に作り出した妖怪であり、誤怪は妖怪でないものを偶然誤つて妖怪としたものである。仮怪は自然の法則にもとづいて生ずるものであるから、自然科学や心理学の法則に照らして研究できるものである。また真怪は不可思議、不可知ということで、その根元を究明してもわからないものである。

こうして見ると井上によると、妖怪は心理現象のみならず自然、社会の諸現象に広くわたっており、いまだ科学的に十分に解明されていない現象といふべきものである。井上はこれらの妖怪は、ほとんど諸科学に加えて心理学という有力な方法によつて解明できると考えていたようだ。

井上円了の妖怪研究の最初の本は『妖怪玄談』である（井上、一八八七）。彼は「余幼にして妖怪を聞くことを好み、長じて其の理を究めんと欲し、事実を蒐集することすでに五年」と書いている。大学二年（明治一五年）頃から妖怪の研究を始めている。井上は後の西洋史学者箕作元八その他をさそつて明治一十九年に「不思議研究会」を設立し、妖怪研究の開始を人びとに知らせ、奇夢、幽霊、狐狸、天狗、犬神、みこ、神下、かみぢろ、予言などの超常現象の資料を送つてくれるように依頼している。その頃流行していたコックリさんの起源をテーブル・ターニング（Table-turning）、テーブルのまわりに数人が集まつて、各々手を出して軽くテーブルに触れると、テーブルがひとりで回転する現象）であると述べている。その一つの有力な説明として、コックリさんは注意集中によつて予期暗示が無意識的、自動的に生ずるものだと心理学的に解説している。明治二三年に「妖怪研究会」を設立し、超常現象について情報交換を行なつている。そして明治二九年に『妖怪学講義』を出版している（井上、一八九六）。

『妖怪学講義』の分類によれば、妖怪には「月の錯視」すなわち、月や太陽の見えの大きさが、水平線や地平線上で大きく見え、上方向では小さく見えるという知覚現象、記憶術、失念術といった記憶、遺伝、神童、偉人などの知能、人格といった一般心理学で扱われる領域も含まれている。またとりあげられている夢、夢告、睡眠、催眠現象といったものは、今日では「変性意識状態 (Altered States of Consciousness)」、すなわち正常な覚醒状態とくらべて、ちがった精神機能を呈する状態として扱われ、異常心理学の中に入れられる。また幻覚、妄想や精神病や信仰療法などは、異常心理学、臨床心理学の中に入る。

読心術、感応、予言、神通などは、超心理学 (Parapsychology) の領域に入れることができる。超心理学の対象として、ESP (Extrasensory Perception、超感覚的知覚) とPK (Psychokinesis、念力) の二つに分けられる。ESPは透視 (clairvoyance)、思念伝達 (telepathy)、予知 (precognition) に分けられる。透視は遮断するものがあっても対象を認識すること、思念伝達はある生体の心の内容が感覚の媒介なしに他の生体に認識されること、予知はまだ生起していない未来の事象が認識されることである。また念力というのは、生体の心の作用が、物質に対して物理的媒介なしに働きかける現象である。最近超心理学の研究も進んできて、実験心理学の方法で研究できるようになり、その事実をかなり確かめることができるようになった。しかし井上の場合はこのような方法ではなく、文献、聞きとり調査や通信で集めた偶発的現象の事例研究ともいべきものである。

また狐憑きつちま、人憑、魔憑、コックリ、テーブル・ターニング、テーブル・トーキング (Table-talking)、テーブルに向かつて、いろいろなことを聞くと、テーブルが床をたたいて返答するといわれる現象)、降神術、幽霊、生霊、死霊、前生、死後、再生などは、今日一般に心霊研究 (psychical research) の領域で扱われている。これらの解明は、心理学でかなり説明できるとしても、まだ未知なことが多い。種々の学問の研究者が協力して行

なう学際的な方法が必要である。

## 2 夢の心理

「熱海百夢」(井上、一九〇二、二九八―三〇三ページ) 井上は熱海に約七〇日ほど病気の療養のため滞在した。そのとき見た八三の夢と東京で見た一七の夢を分析したものである。方法は紙筆を枕元において、夜中に目がさめたとき、それを記録したという。内容はふだん経験したことや、最近経験したこと、ふだん考えていることが多かったという。たとえば熱海では、散歩したことや、訪問や会合のことや病気の療養のことが多かった。場所としては、一番多かったのは、東京、郷里、次に熱海であった。また夢について、身体の具合の悪いときに、夢を見ることが多いこと、夢と夢の間に数日をへて連絡があること、恐ろしい夢は、身体または精神的に不快や苦痛の感覚があるときに生ずること、夢には空間的配置や時間の順序が不明確であること、夢と事実とは大きな相違のあることも指摘している。こうして自分の夢を集計して考察しているが、その考えも妥当であり、心理学的研究としても興味深い。

「仏教夢説一班」(井上、一九〇二、二四九―二七〇ページ) これは仏教の中に見られる夢の事例をあげ、その種類、説明、夢の仏教的意義について考察したものである。夢の生起の理由として、たとえば無明習気(煩惱)、善悪先徴(善悪・吉凶の夢告)、四大偏増(心身の不安定)、巡遊舊識(見聞きしたことへの思い)などを引用しているが、これは心理的説明であり、いずれも納得できるとしている。しかし仏教では、無我無常であり、世界の現象は虚仮無実であることを証明するのに、夢をあげて、夢、幻のごとしと説いているとまとめている。

## 3 重量感覚の実験

「人の感覚を測定する法」(井上、一九〇二、三八一―三八九ページ) これは重量感覚に関する実験心理学

的研究である。重量感覚というのは、錘を親指と人差指とでつまんだり、手掌にのせて重さを感じることである。井上は同じ直方体（長さ約六センチ、幅約四・五センチ、高さ三センチ）のものを、重量に差をつけて、八種類で四〇個つくり、その重量を比較し推定させ、軽いものよりしだいに重いものへと並べさせた。その正答数の平均値をとって、学校別の比較を行なっている。わか国ではまだ実験心理学が十分に根づいていない時期に、このような自ら心理学的実験を行っていることは注目すべきことである。

#### 4 創造性

井上は創造性ということばを使っていないが、創造および創造性に関連する思想やその開発の方法について述べている。また井上自身が創意工夫の人物であったということである。

まず井上の創造性に関する思想について考察してみようと思う。

井上の『心理摘要』および『妖怪学講義』によれば、想像は再想と構想に分けられる。再想は一たび感知したものを心の中に影像（心像のこと）としてとどめ、それを再び生じさせるものをいう。構想は、構成の想像で、諸再想の一部を結合して、その形を変えたものという。この再想の影像の部分と他の影像の部分とを取捨結合した時、一種の新しい影像が生じるといふ。この構想は創造的想像に相当すると思う。その点再想は今日いわれている再生的想像である。構想は智力的構想、感情的構想、意志的構想に分けられている。そして研究者が真理を究明し、新説を発見する時に、想像によって仮説をたてて研究するので、これを智力的構想といい、芸術家の想像は感情的構想といい、また目的とその達成の方法を想定して想像するのを意志的構想といっている。

『妖怪学講義』によれば、神童と偉人について、次のように述べている。いわゆる天才論である。神童とは、生来すぐれているもので、幼い時は神童といわれているが、後によい結果が出る人とそうでない人がいる。一般



には早熟というものは早衰するといわれるが、晩成のものもある。しかし早熟のもので、非凡な人になった例が少なくないとして、その例として、親鸞、道元、菅原道真、J・S・ミル、モーツアルト、林羅山などをあげている。そして神童とは、心理学的に見て、観念の連合配置と注意集中力が智力の作用に影響している。その点偉人が智力のすぐれているのは、いろいろな要因があるとしても、「心力の一方に集合する力」すなわち注意集中力の強さによるものだとして述べている。そしてこの注意集中力の発育は、教育によって行なわれることが大切だといふ。

『新記憶術』によれば、新案的記憶術の中に失念術を入れている。そして記憶力を促進するには、失念術を得ることをすすめている。すなわち記憶をさまたげるものを除くことだといふのである。古い記憶を除去して新しい記憶を入れ換えるのだといふ。またここで大切なことは、記憶力より思想作用または道理作用（思考力のこと）のほうが重要であるといっていることである。もちろん記憶は思考力の基礎である。種々の観念を整理し、配列し、または結合し、分析して、観念の運転活用を自在にするのは、思想力の働きであるといっている。井上はこれを心理経済法といっている。すなわちふつうの記憶をとり除き、有益な記憶を残し、これによって知識を運転活用するというのである。今日でいう思考の創造的な働きを示していると思う。またすでに過ぎ去ったことが頭に浮かんできて、それが忘れ難くて、苦しんでいる場合が少なくない。それを忘れることができる、精神的に楽になる。また小さいことが気にかかり、大事なことの決断がにぶり、十分に考えられなくなることがある。その時失念術が重要になるという。この場合の失念は、注意を他に転じ、不必要な観念が意識面に浮かばないことだといふ。このことは心理療法の基礎的考え方になっている。

井上は学問の日常生活への応用すなわち実用化を重視し、いろいろな創意工夫を自ら行なっている。『哲学う

らなひ』では、新しい易占法を工夫している（井上、一九一六）。すなわち従来の卜筮<sup>はらげ</sup>は、これによって人生の吉凶禍福を予知するのは妄想にすぎないとして、易理を学ぶと共に、従来の筮法を変えて、論理学を用いて筮法をつくった。物事の取捨選択に迷った時、運を天にまかせせる場合、この筮法を使うとよいといっている。

妖怪学の延長としての『妖怪叢書第二編』として『改良新案の夢』（井上、一九〇四）が出ている。これは心理経済、すなわち精神の運用の経済ということで、自分が旅行中とか夜ねむれない時に、時間を有効に使うために工夫し、新案を思いついたものをまとめたもので、発明工夫の書ともいうべきものである。この本の中で工夫したが、必ずしも実用にならないかもしれないって夢と名づけたという。その「緒言」の中で、このような新案は自分の専門の哲学とは関係がないように思われるが、社会日用に哲学が応用可能であることを示すために、こうした試みをしたのであるという。この本を妖怪叢書の中に加えたのは、妖怪研究の結果、心理療法と心理経済があることを思いついたからだという。この本では四四の新案についてのべているが、次のその例をあげてみよう。

「黒板改良」では、黒板を皮でつくり、上下に回転ができ、まわる時に白墨で書いた跡をブラシがふきとる。またもう一つの新案では、黒板を上下二枚を用い、互に代わって上下する時、互にふき去る仕掛けを工夫している、これに図をつけて説明している。

「漢字を活字に組む法」では、活字を組む場合、漢字を分析して活字を組みたてる法を案出している。たとえば松という字は采、海は衆というようにする。こうすると三千字が五一六〇〇字に減ずるといふ。

また漢字のタイプライターがない時代に、漢字のタイプライターを作ることを提案している。

「船に酔わざる法」では、精神を静止すればよいとして、身体と心を別におくようにして、船に乗ったら横に

なつて目を閉じる。心を宇宙の中心におくようにして、それに心を集中するようになるとよいとして自分の体験をのべている。

「寝台の新案」では、昼間は装飾として用い、夜間は不用であるから、床の間を寝台に利用するというのである。そこで床の間を普通のものより一段高くして、それにふた板をのせて寝台にするのである。

「鉛筆の改良」では、木は削りにくいので、木の代りに白墨を用い、鉛筆の心を入れる。白墨は木よりこわれやすいので、その周囲に強い紙を巻くというのである。

そのほか「そろばんの改良」、「夏戸の改良」、「少食にて腹を満たす法」、または「旱天に雨をふらす法」など、いろいろなアイデアを出している。この本を見ると井上がいかにアイデアの豊かな人で、人がまだやらないことを先がけてやってきたことがわかる。

## 5 仏教心理学

井上は、仏教の心理説である「俱舍論」や「唯識論」にもとづいて、西欧の心理学と比較考察している。その比較研究を「仏教心理学」と名づけ、明治三〇年に哲学館の講義録として出版している（井上、一八九七）。本書は仏教の心理説を心理学で解説しようとする困難な仕事をあえて行なった先駆的な業績である。この年に日本心理学の創設者である元良勇次郎が東京大学で心理学実験室をつくる計画を立てている。井上は、仏教の心理学（この場合心理説）と西欧の心理学の異同を論じて、西欧の心理学は、実験研究にもとづいており、確実であるが、仏教の心理学は、世俗的で、不確実ではないかと問いを投げかけて、自ら次のように答えている。両者はそれぞれ目的が違うからだという。すなわち西欧の心理学は、学理を究明するのに対して、仏教の心理学は、その目的が宗教にあり、人をして転迷開悟、安心立命せしめるにあり、また仏教は心理を階梯として、涅槃の頂上に

達しようとするにあるのだと述べている。以上のことは、仏教心理学を理解するのに重要な知見であると思う。井上は末那識・阿頼識は、思想に相当するものとして、思想論の中で論じている。これらは最近の心理学の中で、意識の問題として注目されている。睡眠、夢についても、くわしく述べられているが、これらは意識の問題として、最近の心理学では、生理的心理学、臨床心理学の領域で、医学では精神生理学、精神医学の領域で実験的研究が行なわれている。

仏教の心理学は、主観の面では、おおいにとるべき点があるが、客観の面では、きわめておおざっぱであるといっている。これは仏教の心理説は、ときどき憶測の域を脱せず、事実には合わない。その点西欧の心理学は、仏教のそれよりも、くわしいと述べている。このことは井上の洞察の適確なことを示している。唯識論は、たんに心理説にとどまらず、哲学思想が背景にある。ここで井上は、その該博なる知識をもって、西洋哲学の思想と仏教の思想との比較考察を行なっている。これも大切な視点である。その点仏教心理学は、ある意味で哲学的心理学の特徴をもっている。

仏教はインドに生まれ、中国を経て、日本に入ってきたが、そのいずれの国も実験科学の発達をみなかつたので、その論証はかならずしも十分ではなかつた。仏教は高度の真理を示しているにもかかわらず、その論証、検証は十分に行なわれていない。そこで井上は、仏教は実験科学によって裏付けされるべきだと主張する。最近ようやく禅の生理学的、医学的、心理学的研究が可能になり、その成果があげられている。東洋大学学長になった心理学者の佐久間鼎（佐久間、一九四八）が、坐禅が脳波によって、その生理的・心理的過程が客観的に証明されることを予見している。後に東京大学の精神医学の平井富雄（平井、一九六〇）が、佐久間の予見に示唆を受けて、坐禅によって脳波が変わること、すなわち意識が変わることを実証した。昭和三六年、三十七年度の文部省総

台研究「禪の医学的心理学的研究」では、佐久間が班長をつとめて、禪の総合的科学的研究を行なったが、この研究では筆者も自らの参禅体験にもとづき「禪と創造性」の研究を行ない、今日に至っている（恩田、一九八〇）。井上の提案が今日にいたって実現していることを知って感慨無量なるものがある。この井上の『仏教心理学』は、黒田亮の『唯識心理学』の先駆的研究となっている（黒田、一九四四）。

## 6 禪の心理

「禪宗の心理」（井上、一九〇二、一四九—一五九ページ）井上円了は「禪宗は見性悟道を教えているが、見性悟道とは、自己の心地を開いて、本来の面目を現わすのだ」という。すなわち禪は、仏性（真の自己）を究明することだというのである。「その法則には古則公案があつて、公案とは古人の悟道法則ともいふべきものである」という。そして「坐禅には調身、調心の二法がある。調身の法によって、身体を安定にし、調心の法によって心を寂靜にすることができる」という。

そして、「禪は調身、調心によって、心性の本分を開発する」といい、この心性の本分の開発とは何かについて、心理学的説明を試みている。「心理学でいう知情意は、心的現象で、こういう心的現象があるからには、その心性の本体がなければならぬ」という。井上はこの心性の本体を心体という。「この心体が外界との間で生起するのが、知情意であつて、心的現象というのである。だから心的現象と心体との関係は、風が吹いてきて、水上に波を起こすのと同じく、心体の上に外界の現象が映し出され、あるいは刺激によって心体上に起こす波が、知情意の心的現象である」という。そして「この心的現象は、外界の刺激によって起こる波だから、その性質は有限で相対的ある。しかし心体は、有限相対を超越して、無限絶対のものである。仏教はこの心体を認め、禪はこの心体を究明しようとするものである」という。

また、この心体は禪では、真の自己のことであるが、本来の面目とも本地の風光ともいう。そして「禪の求めるものは、常に心の中の自己の本来の面目（真の自己）であって、心の外に求めているのではない」という。

「通常の心的現象、すなわち知情意は、有限にして相対的なものであるから、この心の動きがやまない間は、絶対にして無限の心体（真の自己）は現われない。そこでこの動く心的現象を止め、知情意を寂靜にして働くことがないようにして始めて、真の自己を見ることが出来る。故に坐禪は、この動いてやまない迷いの雲をはらうようなもので、知情意の働きを止める方法である。すでに有限性、相対性の雲を去り、迷いがはれる時、直ちに真の自己が現れる。それはちょうど水の波が静かになると、水の本質が現われるようなものだ。」ただし「これは心が一たび死んだ境涯であって、これから生まれかわる境涯にいたらなければならぬ」という。これは「大死一番絶後に蘇生える」ということで、精神的に自他が対立している自己が死んで、自他一如の自己として生まれかわることを示している。そして井上は「死んで生まれかわる」というのはどういふことかと自問し、次のように自答している。「心的現象は有限性を持つているが、その裏には無限の性質を持つている。たとえば外界を知ることのできる知性は有限であるが、多少不可知の対象を知り、さらにその対象と一つになろうとする傾向があるのは、知性に無限の性質があることを示すものだ。これと同様に感情も意志も、有限性と無限性の両面を持つている」という。

そして井上は、「これを無限絶対の心体から説明すると、さらにはつきりする」という。すなわち「心的現象は心体から起こり、有限相対の知情意も、裏面は無限絶対の心体であるからだ」という。こうしてみると、心体は真の自己で、本質の世界を示し、心的現象は、その働きで、現象の世界を示しているといえよう。

## 7 心理療法

井上は明治三七年に『心理療法』という著書を出している（井上、一九〇四）。井上は自然にまかせて治癒を待つのを自然療法といい、信頼祈念によつて治療を望むのを信仰療法といい、これを合わせて心理療法と名づけている。井上は当時の催眠術が難病を治療している事実を見て、その治療機制が医学的に十分説明ができないからといって、するべきではない。治癒すべき理由がかならずあるはずだ。さらに学術的研究をすべきであると述べている。フロイト (Freud, S.) は、はじめ催眠法を用いていたが、その適用に困難を生じたので精神分析を生み出し、これに基づいて種々の心理療法が生み出されている。その頃まだ時期が早すぎて、井上はこの心理療法の発展を知らない。

井上は一切の疾患は、身心相関の上に現れるが、その原因は身体から生ずるものと心から生ずるものがある。そこで、身体のほうから治療を行なうのを身的療法または生理療法と名づけ、心のほうから治療を行なうのを心的療法または心理療法と名づけている。今日精神科医は「精神療法」と呼び、心理学者は「心理療法」と呼んでいる。井上は心理療法は応用心理学の一種といっているが、心理学の応用として心理療法と名づけている点、心理療法の最初の名づけ親ともいえよう。井上は心身関係について、人は身体と心の両方から成り、身体の病気はかならず心に影響を及ぼし、苦悩や心配は、かならず内面化して身体の疾患が生ずるといふ、心身相関の事実を指摘している。また医学では、力の及ぶかぎり生理療法をつくして、同時に心の中で自然にまかせるといふ心がけが必要であると述べている。井上はこれを心理療法の本意としている。これらの考えは現代の心身医学に通ずる見方である。

心理療法には、自療法と他療法があるといつて、自己治療法と他者治療法の二種に分けている。他療法には、催眠術があげられている。自療法は、信仰法と観察法に分け、それぞれ自他の別がある。信仰法には自信法と他

信法とがある。自信法は自らこの病気はかならずなおると信ずること、他信法はこの神仏を信ずれば、この病気はかならずよくなると思ふことだとしている。この場合の自信は、本人が自己治癒力を信ずることであり、これは心理療法の実施の基本的条件である。観察法には、自観法と他観法がある。自観法は、病気は心配することはないと知り、また精神の疑いや悩みを断つという坐禅や止観法、また哲学上の道理によって、世界観、人生観を確立して安心をうるのがそれである。他観法は、他の事物を観察して、病気の観念や苦悩をなくす方法で、旅行や転地して自然に病気の苦悩が消えるというのがそれである。

この自観法は、自己が体験する事実を観察する方法で、最近の心理療法で注目されている。たとえば、森田療法、吉本伊信の内観法、禅やヨーガの瞑想法、および自律訓練法、フォーカシング (Focusing) などが、種々の欲求、感情や緊張をとまなうイメージを浄化し、消していくことによって、自然治癒力を開発していくのである。井上はこの自観法を人為的自観法と自然的自観法とに分けている。人為的自観法は、自己の心を反省して種々の観念をつくるが、自己の心を統制する。想像力によって回復を求め、禅の悟りによって痛苦の境涯を脱却するなどをあげている。自然的自観法とは、人の生死や疾患は、人間の力ではどうにもならないと悟り、自然にまかせるといふやり方である。井上は人は病気を観察するうえで、一方において人為を以て治療できると信ずると同時に、他方において自然にまかせれば、自然の力によって治癒する。それをあまり人為にかたよる時は、かえって自然の治癒を妨げるようになる。だから心理療法の帰結するところは、自然にまかせるとあるという。この自然的自観法のような見方は、東洋的な心理療法として、西欧の心理療法に著しく影響を与えている。井上は仏教に詳しいことから、この観法は、今日の心理療法の発展の方向を示唆していると思う。野村章恒によれば、森田正馬 (一八七四—一九三八) は、井上円了の『妖怪学講義』とこの『心理療法』を読んだことで、精神療法



を大学院での研究テーマに選択するのに影響を受けたと推察している（野村、一九七四）。森田療法でいう「あるがまま」という態度は、井上のいう自然療法または自然的自観法の考えから少なからず影響を受けていると思われる。

元良勇次郎が明治二三年に最初の体系的心理学書といわれる『心理学』を出したが、井上は明治二〇年にすでに『心理摘要』という体系的心理学の本を公刊している。井上は心理学の日常生活への応用を重視し、応用心理学の講義を明治二〇年から哲学館で始め、応用心理学の諸分野を開拓している。また明治の心理学の移植の時代に西欧の心理学を導入するだけでなく、東洋の心理説と比較研究を行ない、独自の『東洋心理学』とくに仏教の唯識論にもとづいた『仏教心理学』をまとめている。また『妖怪学講義』は、超常現象の心理的研究を含むもので、超心理学における偶発的現象の事例研究の先駆的研究となっている。また明治三七年に書かれた『心理療法』は、まさしく心理療法と名のついた最初のものであるし、森田正馬が森田療法を生み出すのに影響があったともいわれる。さらに身体の状態と心的現象が相互に影響しあう心身相互作用にも言及している。

以上のように井上は、沢山の先駆的な心理学的業績を出しただけでなく、通信教育という新しい教育方法を用いて、一般大衆に心理学の教育をしたことも、その業績にあげてもよいと思う。そこで井上の業績を心理学史の中に適切に位置づける必要があると思う。

#### 文献

- (1) 平井富雄 一九六〇 坐禅の脳波的研究——集中性緊張による脳波変化——精神神経学雑誌、六二、(1)、七六一—一〇五ページ

- (2) 井上円了 一八八七 心理摘要 哲学書院

- (3) 井上円了 一八八七 妖怪玄談 哲学書院
- (4) 井上円了 一八九四 記憶術講義 哲学館
- (5) 井上円了 一八九五 失念術講義 哲学館
- (6) 井上円了 一八九六 妖怪学講義 哲学館
- (7) 井上円了 一八九七 仏教心理学 哲学館
- (8) 井上円了 一九〇二 中野祖応(編) 甫水論集 博文館
- (9) 井上円了 一九〇四 改良新案の夢 哲学館
- (10) 井上円了 一九〇四 心理療法 南江堂
- (11) 井上円了 一九一六 哲学うらなひ 丙午出版社
- (12) 井上円了 一九一七 新記憶術 文昌堂、明文館
- (13) 黒田 亮 一九四四 唯識心理学 小山書店
- (14) Minami, H. (南 博) 1980 Encounter of the East and the West in Japanese Psychology. In *Abstract Guide, XX II nd International Congress of Psychology*, 1. p. 23.
- (15) 野村 章恒 一九七四 森田正馬伝 白揚社 三四四ページ
- (16) 恩田 彰 一九八〇 創造性開発の研究 恒星社厚生閣
- (17) 佐久間 鼎 一九四八 神秘体験の科学 光の書房 二二三ページ